

世界のソーシャル・ビジネス

アジア編
日本

ありがとうイベントの一環としてカフェのトライアルショップが開かれた

消滅可能性都市から
日本一住みたいまちへ

「有田みかん」で知られる和歌山県有田川町。人口減少が進み、「消滅可能性都市」に該当している。一方で、ポートランドを手本にした住民主体のまちづくりで注目を集める。廃園になった保育所をまちづくりの拠点として再生するなど、人が集う場をつくり出す取り組みが次々に進められている。

(上野山 友之)

有田川町は全国的なブランド、有田みかんや近年ヨーロッパのシェフから高評価を受けている「ぶどう山椒」の産地だ。しかし、同町も人口減少により行政機能の維持が難しくなる消滅可能性都市に該当し、学校や保育所の統廃合も進んでいる。

こうした現状を打破すべく、

有田川町は2015年6月、米オレゴン州ポートランド市に倣うまちづくりプロジェクト「有田川という未来 ARIDAGAWA 2040」を開始。同年7月にはポートランド市開発局のメンバーを迎えてフィールドワークを行った。

有田川町のまちづくりの拠点は、廃園になった田殿保育所だ。2016年4月には地域住民や卒業生など約1千人の来場者を集めたイベント「ありがとう田殿保育所」を開催。そこで集まったさまざまな活用アイデアをまちづくりメンバーが具体的なプランに落とし込んでいく。そうし

て取り壊される予定だった保育所は2018年8月、「THE LIVING ROOM」として生まれ変わった。

同時にクラフトビールが楽しめる「カフェ&ビアバー GOLDERIVER」もオープンし、今後はさらにシェアオフィスやゲストハウスの入居を誘致していく方針だ。

女子力でまちの魅力化も

住民主体のまちづくりの象徴的な存在となっているのが、20—30代の女性を中心とする「有田川女子会Up Girls」。

「有田川という未来」の一環で実施されたまちづくりワークショップをきっかけに誕生したグループだ。ゲストハウス経営、美容師、農家、カフェ経営、主婦など総勢43人が所属している。

なかでも注目されているのが、まちのガイドブック「shiyola」(シエラ)。Up Girls代表の楠部睦美さんは「地元のことを紹介するものがない



Up Girls代表の楠部睦美さん(右)

かったもので、それなら自分たちで作ってしまおうという話になった。地元出身者に加え、編集長は東京からの移住者が務めるなど、多様な視点でまちの魅力を再発見することができた」と笑顔を見せる。

shiyolaは観光スポットの紹介はもちろん、移住者へのインタビューや喜ばれる土産品、有田川の食材を使ったレシピの紹介など女性目線で取材・編集した内容が80ページにまとめられている。まちの魅力を再編集し始めたUp Girlsをはじめ、有田川町の住民主体のまちづくりに今後目目が離せない。